

にかほ市学校環境適正化に関する提言

令和5年3月

にかほ市学校環境適正化検討委員会

目次

はじめに	1
適正化検討委員会に対する教育委員会の考え方	2
I 本市を取り巻く現状	4
1 児童生徒数の推移と将来推計	4
2 近年の学校適正化の状況	5
3 学校規模の変遷	6
II アンケート調査結果の概要	8
1 保護者、教員、自治会長等アンケートの結果	8
2 アンケートの結果から	11
III 学校規模について	12
1 大規模校や小規模校のメリットとデメリット	12
2 市内小中学校のよさと課題	14
3 学校環境適正化に関する主な意見	16
4 提言に関する主な意見	17
5 適正な学校規模	18
IV 提言	19

はじめに

全国的に少子化が進む中で、本市においても小・中学校の児童生徒数が減少し学校の小規模化が進んでいます。

学校の環境適正化（適正規模・適正配置）に関して市内の状況を見ると小規模化が顕著にある現状に加え、児童生徒数の予測推移等を考察すると、教育環境・規模の適正化は必要かつ急務であるという実態が窺われ、その認識をもって積極的に検討・協議に臨んできたところです。

そこで、本委員会では、にかほ市の子どもたちが心身ともにたくましく、豊かな人間性や社会性を養うとともに、確かな学力が身に付けられるような教育環境について検討をして参りました。その中で「地域に暮らす子どもにとって、よりよい教育環境とはどうあるべきか。」また、「公教育における平等性を保障していくためには、どのような学校規模が適正なのか。」ということについて検討をして参りました。

ここにその結果をまとめ、にかほ市教育委員会に提言を行うものです。この提言を通して、市民の方々にはよりよい教育環境を整えていく必要性に目を向けていただければと思います。そして、にかほ市教育委員会においては、この提言に基づいて子どもの現在と未来、保護者の願い、地域の方々の要望について、丁寧かつ真摯に向き合いながら、子どもたちにとってよりよい教育環境を早急に整備され、実効性のある取組の検討が進められるよう期待しています。

にかほ市学校環境適正化検討委員会
委員長 大 橋 次 雄

適正化検討委員会に対する教育委員会の考え方

日頃からの、この検討委員会に対する思いや願いを3つの視点から申し上げます。

まず1つ目は、これまでの推移であります。これまでの、にかほ市の小中学校の適正化については、平成21年2月に提出されました、学校教育将来構想策定委員会の提言を受けまして進めて参りました。その提言の基本的な考え方は、複式学級を解消するというものでありました。この提言を、教育委員会は市民の声、つまり民意として重く受け止め、それに基づいて、小出小学校の複式解消のために平成27年度に院内小学校と小出小学校の統合を進めました。そして平成30年度に、上郷小学校と上浜小学校の複式解消のために、象潟小学校、上郷小学校、上浜小学校の統合を進めて参りました。そのあとの構想については議会の一般質問でたびたびありました。その度に私は、次のように答えておりました。これからの構想については、仁賀保地域、金浦地域、象潟地域という旧町単位の捉え方ではなく、まちづくりの一環として検討していくのだという構えを取らなければなりません。そのために、第2次にかほ市総合発展計画後期基本計画に基づいて、総合的な視野から、5年以内に提言並びに基本的な方針を固めるためにこの委員会を設立しました。

大きな2つ目ですが、過去に学ぼうということです。昭和の大合併では、仁賀保地区、院内地区、小出地区を合併し、旧仁賀保町をつくりました。その時に3地区の一体感を持つために、平沢中学校、院内中学校、小出中学校を統廃合し、新生の仁賀保中学校を新設しております。当時の平沢中、院内中、小出中は統廃合する必要がないほど多くの生徒がおりました。それにもかかわらず、なぜ中央に仁賀保中学校を建てたのですか、建てようとしたのですか、と当時の議員の方、役場の方に聞きました。それに対して、このように答えられました。合併すれば、行政と市民の一体感が大事にされることは当たり前のことです。ですが、その一体感を持って取り組まなければならないのは、教育も同じという捉え方をしました、とのことです。つまり、旧仁賀保町の子ども達をどのように育てていけば良いのか、仁賀保町を支えていく子ども達をどういう環境で育てたら良いのか、という視点から戦略を立て統合を進めた、という話でした。その考え方は仁賀保町だけでなく、象潟地区も同じでした。象潟地区も象潟中学校、上浜中学校、上郷中学校の3校を統合しようと考えたようです。しかし、上浜地区が反対したために、上郷中学校と象潟中学校が統合し、新生の象潟中学校が建てられたということでもあります。私が言いたいのは、この昭和の大合併時の一体感については今も学ばなければならない視点の一つである、と強く感じたことです。

3つ目は、今皆さんが色々な話をしながら提言をなさろうとしていますが、実際に市として、市の教育委員会としてどのような構想を持っているのかということが気になるかと思われます。そこで私の方から、市並びに教育委員会がこのような構想を持っているということをお伝えします。ただ、構想ですのでそれが全てではありません。それをもとに皆さんで提言を考えていただければありがたいです。国立社会保障・人口問題研究所がまとめた将来推計人口によりますと

2040年にはにかほ市全体で1つの小学校、1つの中学校の規模になるという風に推計されていました。したがって、児童生徒の数がどのように推移するかを見極めていかないと、市全体の構想についての作成は難しいと考えているところです。しかし、考えているだけではいけないため、これからの適正化について2つのことを大事にしていく必要があると私は思います。

1つ目は地方創生、2つ目は一体感です。この地方創生と一体感の視点で考えていかなければならないということを、議会でも議員の皆さんに申し上げてきました。地方創生という視点から考えますと、学校は本来、地域社会の輪であり地域社会を構成する重要なパーツの1つであります。そのため地域社会の意向を反映し、地域社会とリンクし、地域社会に貢献できる人材を育てることが学校の責務であります。その視点から、地域に学校を残すという戦略を進めていくことも大事ではないかと思えます。また、一体感という視点から考えますと、先ほど過去に学ぶというところで一体感の必要性を述べましたが、その一体感を持って取り組まなければならないのは、やはり教育であります。そのために、市全体で旧仁賀保町から学んで、にかほ市として子ども達をどのように育てていけばよいのか、にかほ市を支えていこうとする子ども達をどのように育てていけばよいのかという視点から、統合という戦略も進めていくことが必要ではないかと思えます。つまり、市の構想としては、地方創生という視点から、各地区に1つの小学校を残していきたいということがひとつです。それから、一体感という視点から、中学校を一つにしたいということであります。ただ、地方創生、一体感のどちらかに絞るということではなく、この2つの視点の両面から進めていき、にかほ市がもつ豊かな自然や歴史、文化等の多様な資源を最大限活用し、人間として身につけておきたい基礎・基本、周りを活かして人を育ていける人間性、厚い壁にあたっても、少しでも乗り越えていく根気強さ・我慢強さ、感謝・優しさ・思いやりに富んだ豊かな心、そういったものを身につけた子どもを育てていきたいです。そして、自信と誇りを持って、にかほ市を語れること、にかほ市に生まれてよかった、住んでいられてよかった、これからもずっと住んでいきたいと思えることを、そして、にかほ市をどこにいても支えていきたいと思える、そういう豊かな心を持つ子ども達を育てていきたいと、そのためのより良い環境を私たちが考えていかなければならない。それが私たち大人一人ひとりの責任であり、使命ではないかと私は思います。

最後に、委員の皆さんにお願いをします。

- ・少子化の時代であっても教育環境を充実させ、小中学校の質を高めませんか。
 - ・幅広い視点から再編、整備構想について具体的な方針を示していきませんか。
 - ・少子化は今後も続きますが、地域の衰退、学校の統廃合、人口減少が負のスパイラルに陥っていくことがないようにしていきませんか。
 - ・常にマイナスイ思考ではなく、プラス思考に物事を考えませんか。
 - ・21世紀後半を見据えた希望を語れるそういう計画にしていきませんか。
- 以上となりますが、委員の皆さんどうぞよろしくお願いいたします。

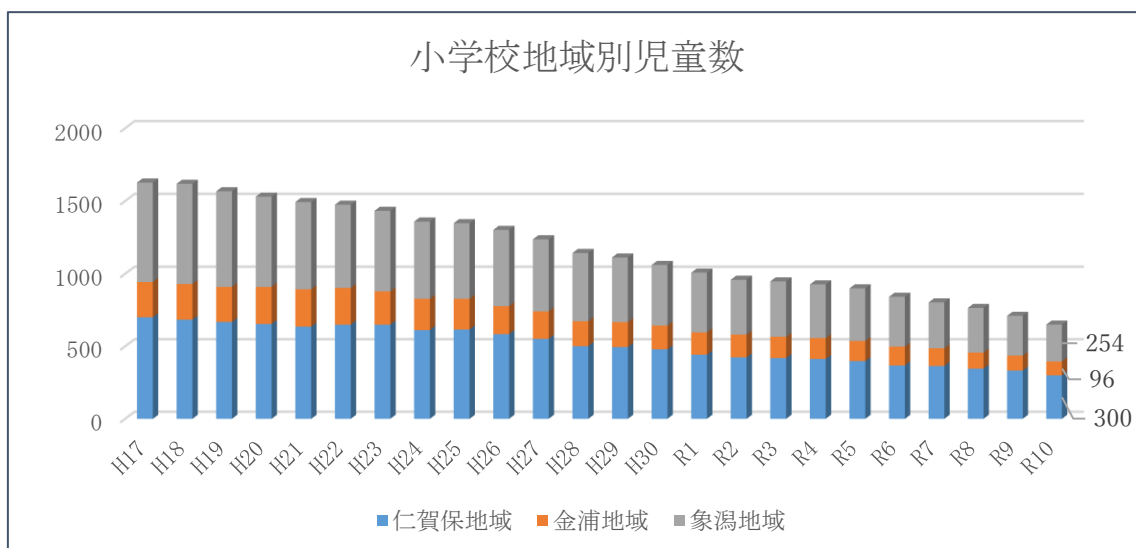
教育長 齋藤 光正

I 本市を取り巻く現状

1 児童生徒数の推移と将来推計

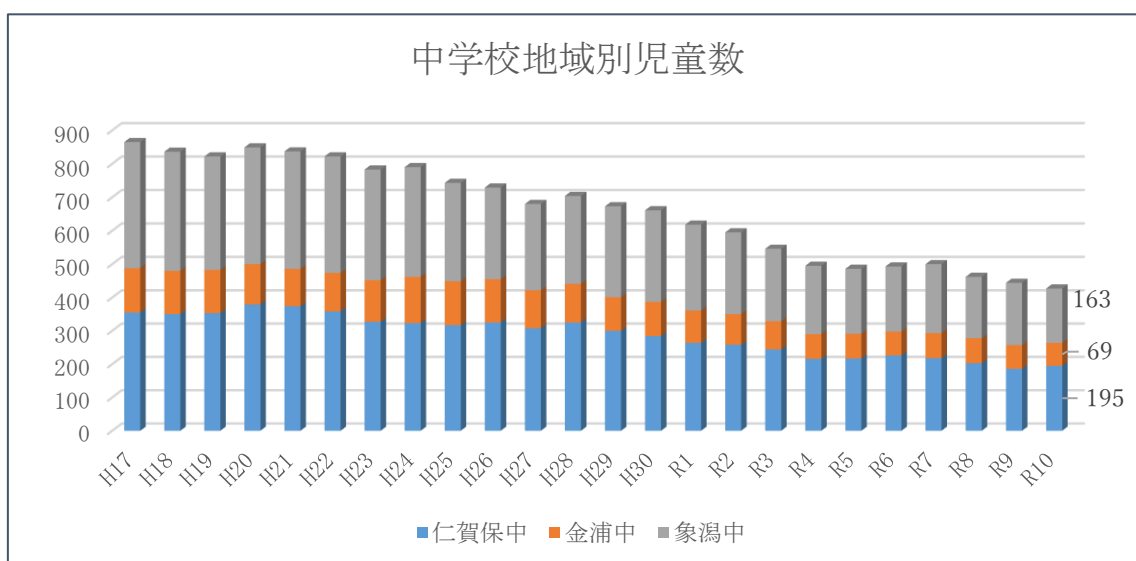
①小学校児童数の推移

平成 17 年にかほ市発足時からの市内小学校児童数の推移は以下のとおりとなっていて、令和 5 年度からの数値は住民基本台帳をもとに推計した見込み数となっています。市内全体で 1,500 人を超えていた児童数は、令和元年に 1,000 人を割り込み令和 10 年には 650 人程度となる見込みです。



②中学校生徒数の推移

平成 17 年にかほ市発足時からの市内中学校生徒数の推移は以下のとおりとなっていて、令和 5 年度からの数値は住民基本台帳をもとに推計した見込み数となっています。市内全体で 800 人を超えていた生徒数は、令和元年に 600 人程度にまで落ち込み、令和 10 年には 400 人程度となる見込みです。



2 近年の学校適正化の状況

にかほ市ではこれまで小学校の統合を3回、中学校の統合を1回行っていきます。
 児童数・生徒数の減少に伴う複式学級解消のためのものですが、いずれも合併前の
 旧町を範囲として行われています。

統合年	統合校	児童数	学級数	統合後の学校	児童数	R4 児童数
平成 21年度	院内小学校	160	6	院内小学校	平成22 173	112
	釜ヶ台小学校	12	3			
平成 26年度	院内小学校	134	6	院内小学校	平成27 183	
	小出小学校	57	6			
平成 29年度	象潟小学校	320	12	象潟小学校	平成30 418	370
	上浜小学校	64	5			
	上郷小学校	61	5			

統合年	統合校	生徒数	学級数	統合後の学校	生徒数	R4 生徒数
平成 21年度	仁賀保中学校	368	10	仁賀保中学校	平成22 358	216
	釜ヶ台中学校	6	2			

3 学校規模の変遷

①小学校の規模

これまで小学校の統合等により、一時的な児童数の増加はありましたが、統合以降も減少が続いており、今後もその傾向は変わらないと見込まれます。そのため、現在全学年で1学級の院内小・金浦小は複式学級となる可能性が高い状況であり対応策の検討が必要となっています。

小学校	H30 (実数)		R4 (実数)		R10 (推計)		R12 (推計)		R17 (推計)	
	2018		2022		2028		2030		2035	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
平沢小	327	11	301	11	236	9	217	8	176	6
院内小	152	6	112	6	64	6	59	5	47	4
金浦小	164	6	144	6	96	6	88	5	71	4
象潟小	418	13	370	12	254	10	234	9	189	7
計	1,061	36	927	35	650	31	598	27	483	21

②今後の小学校1年生の数

近年の出生数は年間100人を割り込んでいるため、1校1学年の児童数は10人未満から30人程度で推移していく見込みとなっています。

小学校	R5		R6		R7		R8		R9		R10	
	2023		2024		2025		2026		2027		2028	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
平沢小	49	2	34	1	44	2	46	2	35	1	29	1
院内小	19	1	12	1	12	1	5	1	12	1	10	1
金浦小	22	1	18	1	17	1	12	1	14	1	16	1
象潟小	62	2	43	2	47	2	38	2	31	1	31	1
計	152	6	107	5	120	6	101	6	92	4	86	4

③中学校の規模

中学校では、平成 21 年に釜ヶ台中学校が仁賀保中学校に統合されています。中学校の生徒数も一時的な増加はありましたが、減少傾向が続いており、今後もその傾向は変わらないと見込まれます。現在複数学級のところも将来的には 1 学年 1 学級となる見込みです。

中学校	H30 (実数) 2018		R4 (実数) 2022		R10 (推計) 2028		R12 (推計) 2030		R17 (推計) 2035	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
仁賀保中	284	9	216	6	195	6	182	5	146	4
金浦中	103	3	74	3	69	3	64	3	51	3
象潟中	274	9	205	6	163	6	152	5	122	4
計	661	21	495	15	427	15	398	13	319	11

④今後の中学校 1 年生の数

中学校の場合、出生数の影響は小学校より遅く反映してくるため当面は現状の学級数を維持できますが、令和 14 年以降は学級数が減少していく見込みです。

中学校	R5 2023		R6 2024		R7 2025		R8 2026		R9 2027		R10 2028	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
仁賀保中	80	2	75	2	60	2	64	2	59	2	67	2
金浦中	25	1	27	1	24	1	24	1	24	1	22	1
象潟中	70	2	62	2	73	2	47	2	65	2	51	2
計	175	5	164	5	157	5	135	5	148	5	140	5

中学校	R11 2029		R12 2030		R13 2031		R14 2032		R15 2033		R16 2034	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
仁賀保中	68	2	46	2	56	2	51	2	47	2	39	1
金浦中	22	1	18	1	17	1	12	1	14	1	16	1
象潟中	62	2	43	2	47	2	38	1	31	1	31	1
計	152	5	107	5	120	5	101	4	92	4	86	3

Ⅱ アンケート調査結果の概要

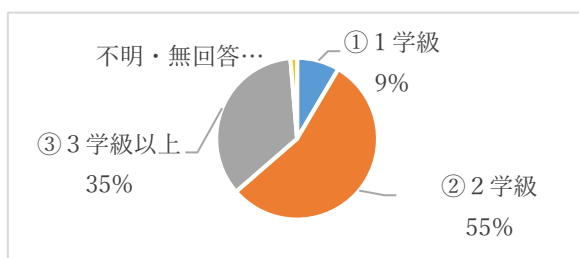
1 保護者、教員、自治会長等アンケートの結果

令和4年9月1日から16日にかけて、保護者等約3,000人を対象に「にかほ市学校環境適正化アンケート」を実施しました。回収率は82.7%で、2,404人から回答を得ました。

【学校規模について】

問 国においては、小学校では1学年あたり2～3学級（1学級あたりの人数は35人程度）を標準としていますが、何学級が望ましいと考えますか。

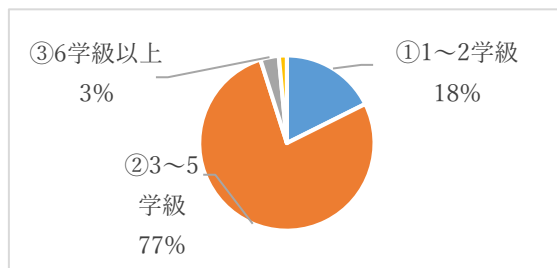
① 1学級 ② 2学級 ③ 3学級以上



・ 2学級以上の複数学級が適切と回答・・・90%

問 国においては、中学校では1学年あたり4～6学級（1学級あたりの人数は40人程度）を標準としていますが、何学級が望ましいと考えますか。

① 1～2学級 ② 3～5学級 ③ 6学級以上

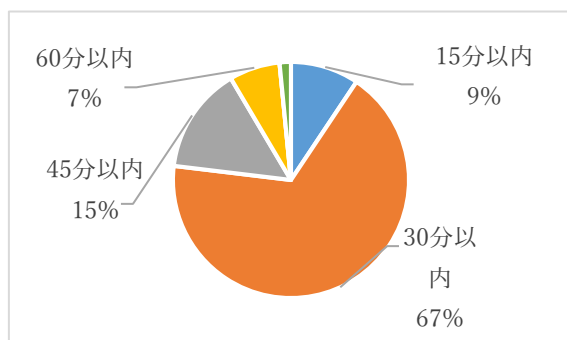


・ 3学級以上の複数学級が適切と回答・・・80%

【通学時間について】

問 国においては、小学校までの通学時間（距離）の目安をおおむね1時間（4キロメートル）以内としています、どの程度の時間までが通学可能な範囲だと考えますか。

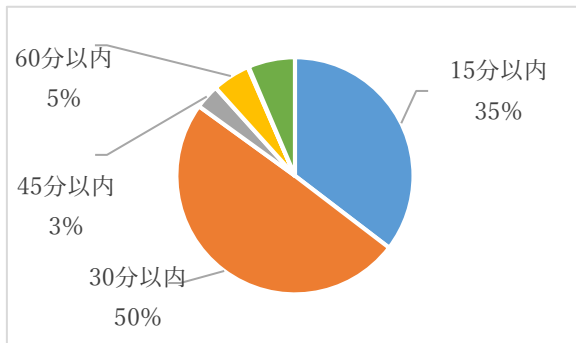
① 徒歩の場合



小学校、徒歩の場合

・ 30分以内・・・67%
 ・ 45分以内・・・15%
 ・ 15分以内・・・9%

②スクールバスの場合

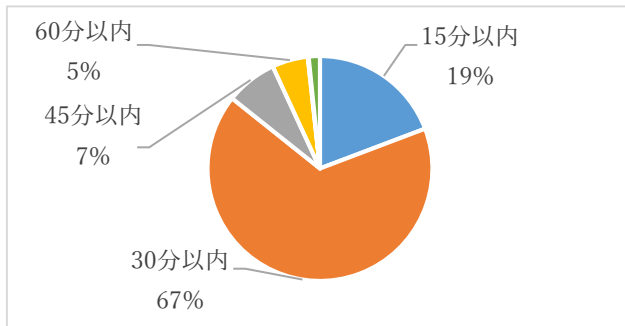


小学校、スクールバスの場合

- ・ 30分以内・・・50%
- ・ 15分以内・・・35%
- ・ 60分以内・・・5%

問 国においては、中学校までの通学時間（距離）の目安をおおむね1時間（6キロメートル）以内としています。どの程度の時間までが通学可能な範囲だと考えますか。

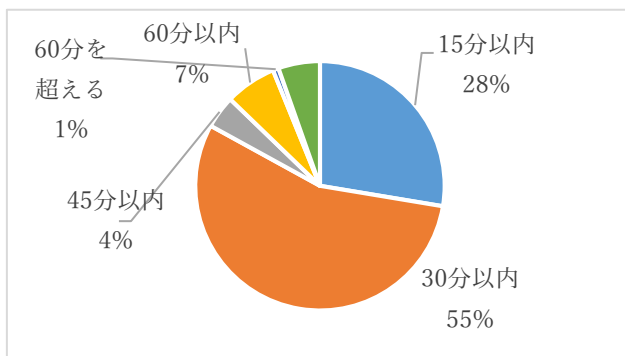
①自転車の場合



中学校、自転車の場合

- ・ 30分以内・・・67%
- ・ 15分以内・・・19%
- ・ 45分以内・・・7%

②バスの場合



中学校、バスの場合

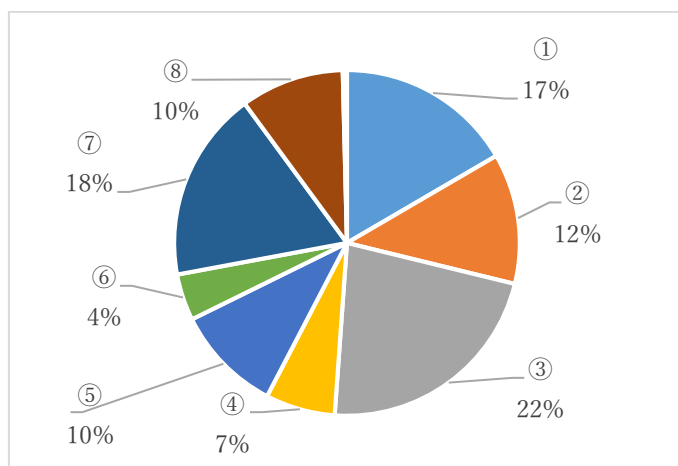
- ・ 30分以内・・・55%
- ・ 15分以内・・・28%
- ・ 60分以内・・・7%

【学校環境適正化について】

問 学校環境適正化（適正規模・適正配置）を考える上で、どのような教育環境を求めますか。（複数回答可）

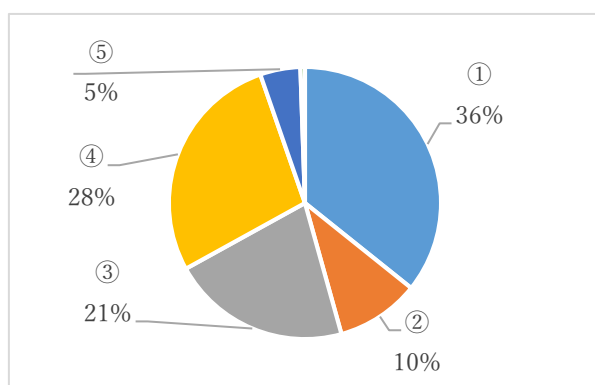
- ①子ども同士が刺激しあい、学力、体力を高めあうことができる（17%）
- ②集団の中でいろいろな役割分担を経験できる
- ③子どもたちが社会性や協調性を身に付ける機会がある（22%）
- ④部活動が充実している（種類、人数など）
- ⑤多様な学習形態の授業指導を受けることができる

- ⑥学校行事で一人ひとりが自主的に活躍できる場がある
- ⑦一人ひとりに目が行き届いた、きめ細やかな指導を受けることができる (18%)
- ⑧子ども同士で活発なコミュニケーションができる
- ⑨その他 (・小学校ではスクールバスを使わないこと・子どもたちが安全に通学、勉強できる環境・先生の負担軽減・人数規模だけで考えないで)



問 児童生徒数が少ない小規模校対策として、どのような方法が考えられますか。
(複数回答可)

- ①通学区域(学校区)の変更や柔軟な運用を検討する (36%)
- ②学区外からの通学者を増やす方策を検討する
- ③小規模校間での学校の統廃合を検討する (21%)
- ④小中一貫校の新設等、新しい学校形態を検討する (28%)
- ⑤複式学級(2つ以上の学年をまとめて1学級にする)になっても存続させる
- ⑥その他(・複式とならないよう講師等の配置・ネット環境、リモートの活用・他校と積極的に交流を持ち視野を広げる・小規模のまま継続していけたらと思います・小規模校にしかできない魅力開発)



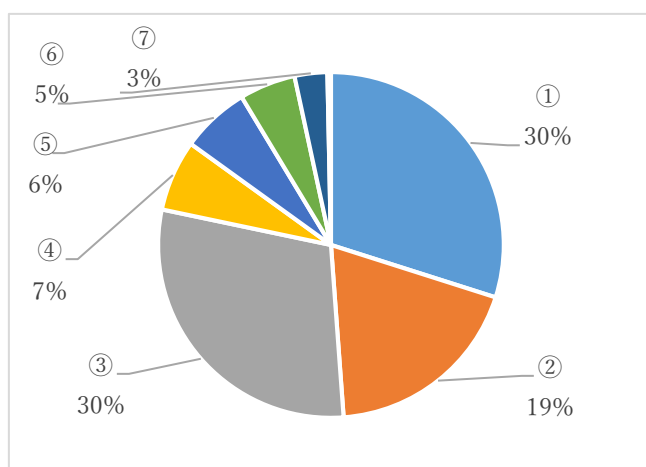
問 今後、小学校の統合や中学校の統合を検討するとした場合、特に配慮が必要だと思われることは何ですか。(あてはまるもの3つ以内に○)

- ①児童生徒が快適に学習できる環境整備 (30%)
- ②統合した学校の設置場所 (19%)
- ③安全な通学手段(スクールバスの導入) (30%)
- ④部活動の充実
- ⑤地域とのつながり

⑥地域の過疎化対策

⑦学校の跡地利用

⑧その他（学校から離れた場所から通学する場合、緊急時の帰宅などが難しくなるのでは・小規模校から通うことになる児童生徒の心のケア・環境変化による子どもの精神面への配慮・いじめ対策・不登校のサポート・小学校はこれ以上統廃合しないこと）



2 アンケートの結果から

○学校規模については、小学校で2学級以上、中学校では3学級以上の複数学級を望ましいとする意見が多かった。

○通学時間（距離）については、小学校・中学校ともに手段を問わず30分程度の範囲を望ましいとする意見が多かった。

○どのような教育環境を求めるかについては、

①社会性や協調性を身につける機会があること

②一人ひとりに目が行き届いた、きめ細やかな指導を受けることができること

③子ども同士が刺激しあい、学力、体力を高めあうことができること

の順で割合が高かった。

○小規模校対策として考えられる方法としては、

①通学区域（学区）の変更や柔軟な運用を検討すること

②小中一貫校等の新設など、新しい学校形態を検討すること

③小規模校間での統廃合を検討すること

の順で割合が高かった。

○統合を検討する場合に、配慮が必要なことについては

①児童生徒が快適に学習できる環境整備

②安全な通学手段（スクールバス）

③統合した学校の設置場所

の順で割合が高かった。

Ⅲ 学校規模について

1 大規模校や小規模校のメリットとデメリット

大規模校	メリット	デメリット
学 習 面	<ul style="list-style-type: none"> ●集団の中で、多様な考え方に触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて、一人ひとりの資質や能力をさらに伸ばしやすい。 ●運動会などの学校行事や音楽活動等の集団教育活動に活気が生じやすい。 ●中学校の各教科の免許を持つ教員を配置しやすい。 ●児童・生徒数、教職員数がある程度多いため、グループ学習や習熟度別学習、小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態を取りやすい。 ●様々な種類の部活動等の設置が可能となり、選択の幅が広がりやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ●全教職員による各児童・生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。 ●学校行事や部活動等において、児童・生徒一人ひとりの個別の活動機会を設定しにくい。
生 活 面	<ul style="list-style-type: none"> ●クラス替えがしやすいことなどから、豊かな人間関係の構築や多様な集団の形成が図られやすい。 ●切磋琢磨すること等を通じて、社会性や協調性たくましさ等を育みやすい。 ●学校全体での組織的な指導体制が組みやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学年内・異学年間の交流が不十分になりやすい。 ●全教職員による各児童・生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。
学校運営面 財 政 面	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員数がある程度多いため、経験、教科、特製などの面でバランスのとれた教職員配置を行いやすい。 ●学年別や教科別の教職員同士で、学習指導や生徒指導等についての相談・研究・協力・切磋琢磨などが行いやすい。 ●校務分掌を組織的に行いやすい。 ●出張、研修等に参加しやすい。 ●子ども一人あたりにかかる経費が小さくなりやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員相互の連絡調整が図りづらい。 ●特別教室や体育館等の施設・設備の利用の面から、学校活動に一定の制約が生じる場合がある。
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ●PTA活動等において、役割分担により、保護者の負担を分散しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者や地域社会との連携が難しくなりやすい。 ●災害発生等による緊急避難時に、混雑が生じやすい。

小規模校	メリット	デメリット
学 習 面	<ul style="list-style-type: none"> ●児童・生徒の一人ひとりに目が届きやすく、きめ細かな指導が行いやすい。 ●学校行事や部活動等において、児童生徒一人ひとりの個別の活動機会を設定しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ●集団の中で、多様な考え方に触れる機会や学びあいの機会、切磋琢磨する機会が少なくなりやすい。 ●1学年1学級の場合、共に努力してよりよい集団を目指す、学級間の相互啓発がなされにくい ●運動会などの学校行事や音楽活動等の集団教育活動に制約が生じやすい。 ●中学校の各教科の免許を持つ教員を配置しにくい。 ●児童・生徒数、教職員数が少ないため、グループ活動や習熟度別学習、小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態をとりにくい。 ●部活動等の設置が限定され、選択の幅が狭まりやすい。
生 活 面	<ul style="list-style-type: none"> ●児童・生徒相互の人間関係が深まりやすい。 ●異学年間の縦の交流が生まれやすい。 ●児童・生徒の一人ひとりに目がとどきやすく、きめ細かな指導が行いやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ●クラス替えが困難なことなどから、人間関係や相互の評価等が固定化しやすい。 ●集団内の男女比に極端な偏りが生じやすくなる可能性がある。 ●切磋琢磨する機会等が少なくなりやすい。 ●組織的な体制が組みにくく、指導方法等に制約が生じやすい。
学校運営面 財 政 面	<ul style="list-style-type: none"> ●全教職員間の意思疎通が図りやすく、相互の連携が密になりやすい。 ●学校が一体となって活動しやすい。 ●施設・設備の利用時間等の調査が行いやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員数が少ないため、経験、教科、特性などの面でバランスのとれた配置を行いにくい。 ●学年別や教科別の教職員同士で、学習指導や生徒指導等についての相談・研究・協力・切磋琢磨等が行いにくい。 ●一人に複数の校務分掌が集中しやすい。 ●教員の出張、研修等の調整が難しくなりやすい。 ●子ども一人あたりにかかる経費が大きくなりやすい。
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者や地域社会との連携が図りやすい。 ●災害発生等による緊急避難時に混雑が生じにくい 	<ul style="list-style-type: none"> ●PTA活動等における保護者一人あたりの負担が大きくなりやすい。

2 市内小中学校のよさと課題

(令和4年12月22日 第2回適正化検討委員会グループ討議より)

【小学校】

	よ さ	課 題
平 沢 小	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスが複数あり、他のクラスと競える。 ・児童、保護者ともに理科、科学分野への関心が高く、理科研究発表、発明工夫作品展やWROなど各種大会でも優秀な成績を収めている。展望室にプラネタリウムがある。 ・たくさんの人との関わりができるため、日常の学校生活の中で多様性を学ぶことができる。 ・校舎のつくりがよく、作業がしやすい。学年部ごとに分かれて（まとまって）の活動が多岐にわたってできる。 ・オーシャンビュー。校舎からの景色がよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人数が多いためか「誰かがやってくれる」と自分の存在を隠そうとする姿が見られる。 ・一人ひとりの活躍の場をしっかりと与えられることが難しく、各学級で活躍の場を与えられるよう取り組んでいる。 ・校舎が海から近く津波の心配がある。 ・天候に関係なく自家用車での送り迎えが多い。 ・校舎や給食設備の老朽化。 ・職員室が2階で来校者の対応がしにくい。
院 内 小	<ul style="list-style-type: none"> ・人数が少ない分責任感が強い。 ・地域に密着していて、祭りや年中行事が行いやすい。 ・先生との距離が近いように感じる。 ・親同士もお互いを認識しているため安心感がある。 ・GIGAスクール構想推進モデル校としてICTを活用した授業に積極的に取り組んでいる。 ・一人ひとりの活躍の場が与えられ、児童の自己肯定感も向上している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人数が少ないため単独でできないスポ少がある。 ・校舎の老朽化。修繕の必要などが多い。 ・人間関係が固定化され、新しい考えが生まれにくい。
金 浦 小	<ul style="list-style-type: none"> ・来校者、地域の方へ挨拶が元気にできる。 ・先生の目が届きやすい。 ・中学校と隣接していて、通学や送迎にメリットがある。 ・人数が少ないので、一人一人が活躍できる場面が多い。 ・地域全体で学校を見守ってくれている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・物心ついた時からずっと一緒にいるため、刺激が少なく競争心が育ちにくい。 ・人数が少ないため、学ぶ先生の人数に限られる。 ・スポ少などが単独で成立しにくい。 ・人間関係の固定化が少し強い。
象 潟 小	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな地域から集まっている。 ・全学年複数クラスで子どもたちが切磋琢磨している。 ・登校班があり、安全に登校できている。 ・防災教育に力を入れており、児童や教職員の防災への意識も高まってきている。 ・地域支援コーディネーター、ジオガイドなどの協力により「にかほジオ学」を学ぶことができる。また算数や家庭科へのゲストティーチャーの協力も充実している。地域の伝承芸能を学ぶ特色のあるクラブがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通の便が良いが、交通事故が心配される。 ・海が近く津波の心配がある。 ・教職員が多く、共通理解を図る際に段階が必要。 ・自己肯定感や自尊感情が低い傾向にある児童も見られる。

【中学校】

	よ さ	課 題
仁賀保中	<ul style="list-style-type: none"> 施設の広さ、立地が良く勉強に集中できる環境。 複数の企業が地元であり、職場体験等キャリア教育ができる。 自転車通学のため体力向上につながる。 陸上競技、サッカー部が強い。 クラス替えにより交流関係が広がる。 校舎が新しく立派である。 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動の人数が減っていることで、単独で大会に出られないものもある 学習意欲や自己肯定感が低い生徒に見られるが、生徒指導を充実させることで、学習面が向上してきている。
金浦中	<ul style="list-style-type: none"> 地域内一小学校、一中学校であるため絆が強い。 保護者、地域が協力的。 人数が少ないので、余裕をもって教室を使える。 子供らしさのある素直な子が多い印象。 ICT機器を活用した授業や持ち帰りに積極的に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの評価が固定され、競争心が生まれにくい。 人間関係が固定化され、新しい人間関係を築きにくい。 チーム競技は、人数面でハンディがある。 校舎が古い。職員室が2階で来校者の対応がしにくい。 生徒数が少なく、技能教科の先生を配置できない。
象潟中	<ul style="list-style-type: none"> 大人数の中でもまれていて、精神的にたくましい子が多い。 上位集団でのライバル意識が強い。 クラス替えができ、友達関係が微妙になってもリセットしやすい。 校舎が新しく立派である。 校舎周辺に市の施設が隣接している。 運動会の応援合戦が名物である。 	<ul style="list-style-type: none"> 上位と下位の子どもの目が行くが、中位の子どもの目が届きにくい。

※にかほ市の小中学校に大規模校は存在せず、適正規模の範囲内にある学校以外はいずれも小規模校である。適正規模にある学校も将来的には小規模化する見込みである。

3 学校環境適正化に関する主な意見

(令和5年1月30日 第3回適正化検討委員会グループ討議より)

	主 な 意 見
適正化	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒数の実績や推移をみると統合しかないと思う。 ・教育長から「にかほ市としての一体感」という言葉があった。この言葉から将来的な統合は避けられないと思った。 ・自分の子供のことを考えると、小学校は統合しない方がいいと思う反面、将来的に子供の数の増加は見込めないので市全体で検討する方がいいと思う。 ・将来、未来のことを考えて検討していくことが必要。 ・まちづくりも視野に入れて学校のあり方を考えないといけない。 ・個人的には地域社会とのつながりからも学校を残したいが、将来を見据えると適正化をすすめる必要がある。 ・建物を維持していくとなると財政的にもまとまった方がいいと感じた。 ・2040年には小・中各1校という予測が出ているので、人数が少なくなることを見越して検討を始めたほうがいい。 ・H30の象潟小統合に子どもが関わった。地区から学校がなくなるということは、子どもたちが集まる場もなくなるので、地域の方々と接する場も減ることになり地域でもかなり名残惜しさはあったと思う。ただ、時間がたって今考えれば必然だったと思う。当時は親として感傷もあって非常に寂しい思いだったが、今となればやむを得なかった。 ・子どもの数が急激に増えるわけでもないし、校舎の維持管理、部活動の存続を考えると適正化を進めていくことは必然なのかなという思いがある。 ・自分たちは35人学級で2クラスだった。10人数で1クラスとっていいのかわかなくて。こういう学校でこういう人づくりができるのか。人づくりとまちづくりはセットだと思う。
学校規模	<ul style="list-style-type: none"> ・学校として停滞しないためには、中学校では1学年3学級は必要。 ・中学校で1学年3学級ないと、免許外指導を解消できない。金浦中学校は免許外の先生がいる。 ・1学級の人数が極端に少なくなると、複式にしなければいけないという問題にもつながる。 ・複式学級は1つの教室で2つの学年が勉強する。上の学年に教えているとき、下の学年は自分で問題を解くという時間を交互に過ごすことになる。体育は1～3年生、4～6年生が一緒に行く。そうしないと個人競技以外ができない。 ・子どもの気持ちを考えたとき「この部活はこの学校にしかないから」「人が少ないから」といった障害が出てくると子どもたちがかわいそう。子どもたちに活動しやすい環境を作ってあげられることと統合との関わりは大きい。 ・大規模のデメリットよりも、小規模のデメリットが大きいのでは。 ・中学校は複数学級が理想。小学校は通学の問題があり、遠いだけで学校に行くことが億劫になることもある。 ・複数学級あるとクラス替えの楽しみがある。ただ、大人数になるとやかましきもある。
手法	<ul style="list-style-type: none"> ・現状のまま小学校・中学校を一貫校にしたとしても、人数が減っていくことに変わりはないため統合を伴っていないと難しいと思う。 ・平沢、金浦は小中一貫校対応できるのではないかな。 ・通学区域の変更、弾力化は市内学校で児童生徒の取り合いになるだけで問題解決にはならない。 ・小中一貫校の導入は有意義な教育手法ではあるが、小規模校の解消につながるものではない。
実施時期	<ul style="list-style-type: none"> ・やはり複式学級発生前ではないか。中学校は少し時間がありそうだが小学校は待ったなしの状況。 ・小学校の推移をみれば院内小学校の令和8年の入学者が6人となっている。小学校は早々に。子どもたちに不便な思いはさせたくない。 ・タイミングが遅い。スポ少や部活が合同になって、子どもの減少は前から分かっていたこと。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・海に近い学校は町の中に入っていった方がいいと思う。子どもたちを守っていくというのは、災害からも守るということ。立地を変えることも検討し、統合していくのが理想。 ・いきなり市内1校ではなく、2段階で考えるべきではないか。人数だけの問題ではなく、子どもたちは学校だけでなく家庭と地域みんなで育てていくもの。 ・小学校2校、中学校2校と最初は思ったが、中学校は思い切って1校にまとめたほうが生徒数が増え、教職員の配置も多くなるし、さまざまな先生との関りができる。

4 提言に関する主な意見 (令和5年2月28日 第4回適正化検討委員会より)

主 な 意 見

- ・提言(案)にある、より良い学習環境を子どもたちに提供することを最優先とすること、ということが大前提だと思う。学校の主役は子どもたちなので、子どもたちの未来を考えることがこの適正化委員会の使命だと思う。
- ・将来的な人数をはっきり見せることで、最初のアンケートをまた違う気持ちで見ることができるのではないかと思う。
- ・教育環境を考えると、統合については仕方がない。通学について自然災害時の対応も考えてほしい。
- ・統合は避けられないと思うが、各学校の持っている風土、文化が失われないように維持できればいいと思う。
- ・統廃合と聞くとマイナスな印象と考えてしまっていたが、捉え方を変えて、統合をいい機会だと捉えて進めていかなければいけないと思った。
- ・統廃合は仕方がないことだと思いつつ参加している。子どもたちの環境を考えると、少しでも人数が多いほうがいいと考える。
- ・統廃合をすることでの変化について、学級数、生徒数以外でも目に見える形で把握したい。経済的な変化がどうなるのかが気になる。学校が一つなくなることで、かかるお金にどれだけの変化があるのか、統合された後に教員数がどうなるのか等、そういった変化が目に見える形にした方が進めやすいと思う。
- ・学校が地域から無くなるということは、地域コミュニティの面で大変なことだと思われるので、統合は段階的に進めた方がいいと思う。
- ・小学校の複式学級を解消することについては同意を得られることだと思う。しかし、それ以降については地域の意見をもっと集めないともまとまらないのではと思う。中学校に関しても、この委員会のみでは決められない。
- ・一気に統合することについて納得しない人も多くいると思うので、段階的に進める方がいいと思う。
- ・地域コミュニティのことを考えると段階的に進めてほしいが、財政面等考えると一気に進めてよいものを作った方が将来の子どもたちにとってはいいと思う。
- ・統合を段階的に進めた方がいいという意見があるが、期間をどう設けるか考えなければいけない。地域へ説明する際にも、期間を示した方がイメージしやすい。
- ・地域や保護者にはいろいろな考えの人がいるが、先を見据えて教育委員会で考えて進めてほしい。子どもは案外環境に適応するし、親は協力できることはしていくと思う。
- ・統廃合に関する地域の方々の話し合いについては、数字などを明確にして丁寧に進められれば、考え方が変わる方もいるかもしれない。進め方については、少なくなったからまた統合というように段階的に行うよりは一気に行った方がいいと考えている。何度も統合を経験するようなことは避けてほしい。
- ・学校がコミュニティとして大事なことはわかるが、これから地域の方々と話し合うときに、経済的な変化をしめすことで、こうした方がいいなどさまざまな意見が出やすくなると思う。

5 適正な学校規模

学校規模に起因する教育課題を解決し、よりよい教育環境を実現していくためには、学校規模の標準を定め、維持していくことが重要となります。

その標準を維持できない学校については、よりよい教育効果が発揮できるよう、学校規模の是正を含めた教育環境の整備を行っていく必要があります。

(1) 学校規模に対するアンケート結果

小学校 1 学年あたりの望ましい学級数・・・2 学級（55%）、3 学級以上（35%）

中学校 1 学年あたりの望ましい学級数・・・3～5 学級（77%）、1～2 学級（18%）

(2) にかほ市における適正な学校規模

法令や市民アンケート結果を基に、本市の実態と学校規模によってどのような課題があるかを総合的に判断し、学校としてよりよく教育効果が発揮できる規模を以下のとおりとします。

- | | |
|------|------------------|
| ○小学校 | 12 学級（各学年 2 学級）～ |
| ○中学校 | 9 学級（各学年 3 学級）～ |

IV 提 言

検討委員会でのこれまでの議論を踏まえ、にかほ市の今後の学校のあり方について、以下のとおり提言します。

- 1 適正化の実施に当たっては、よりよい教育環境を子どもたちに提供することを最優先とし、長期的な見通しをもって行うべきであること。
- 2 適正化計画の策定にあたっては、小学校と中学校を一体的にとらえ、当市の児童生徒の状況及び通学距離などの児童生徒の負担、地域の状況など様々な観点から検討すること。
- 3 適正化計画は保護者や地域の理解を得られるよう丁寧に説明して進めること。
- 4 小学校では、1学年2学級以上を目指し、学級活動やグループ活動が効果的に行うことができる規模の人数を確保するよう努めること。
- 5 中学校では、1学年3学級以上を目指し、すべての教科において専門教科の免許を有する教員が確保できる体制を整えるよう努めること。
- 6 複式学級は、学習活動が制限され多様な学習活動が難しいことや、教員の負担が大きいことなどから、可能な限り編成しないよう努めること。
- 7 学校は地域コミュニティの中核であることから、学校の統廃合を行う場合は、地域とのつながりの維持などの配慮に努めること。
- 8 統廃合にあたっては、各学校の持っている風土や文化、特色ある教育活動について統合後の教育活動の中で継続されるよう配慮すること。